

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520194

研究課題名（和文） 啓蒙前期の地下文書と政治新聞における神の正義論解体

研究課題名（英文） The theodicy contested by the clandestine philosophical manuscripts and political journalism in the Early Enlightenment

研究代表者

三井 吉俊 (MITSUI YOSHITOSHI)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：00157546

研究成果の概要（和文）：ピエール・ベールの弁神論批判は、ナント勅令廃止による亡命および宗派對立と政治的混乱の経験を経た無名の知識人たちに、啓蒙前期の地下文書の多くを生み出させた。『三詐欺師論』はオランダで生産されたその代表である。フランス・カトリック教会の司祭ピエール・キュッペ『万人に開かれた天国』もベールの批判に答えようとする極論だった。ニコラ・グードヴィルの反ルイ十四世の文筆活動も「信教の自由」と社会の安寧を求める彼らの活動の一環と見なせる。

研究成果の概要（英文）：Pierre Bayle's criticism of theodicy led the minor French intellectuals to produce clandestine philosophical works, such as the famous *Trois imposteurs* in the Netherlands, the heretical theory of *Le Ciel ouvert à tous les hommes* by Pierre Cuppé in the French Catholic Church, and the political journal against Louis XIV by Nicolas Gueudeville whose purpose was to restore the religious liberty and social well-being.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：仏文学、啓蒙思想、18世紀、地下文書

1. 研究開始当初の背景

(1) 「古典主義期における哲学的地下文学 La littérature philosophique clandestine de l'âge classique」の研究は、Olivier Bloch

(Université de Paris I) と Geneviève Artigas-Menant (Université de Paris XII) に主導されて、Centre d'étude de la langue et de la littérature françaises des XVIIe et

XVIIIe siècles (Université de Paris IV)を中心になされてきた。その最新の成果報告・情報交換は、年一回発行される学術誌 *La Lettre clandestine* (Presses de l' Université de Paris-Sorbonne, 1992-)、編集実務責任者 Alain Mothu, Université de Paris IV)で行われ、基本的資料の提供は、叢書 *Libre pensée et littérature clandestine* (Voltaire Foundation, Oxford, 1993-)、現在は出版社を Champion, Paris に変更、編集主幹は Antony McKenna, Université de Saint-Étienne)でなされてきた。研究代表者は、常時 Olivier Bloch、Geneviève Artigas-Menant、Alain Mothu らと連携して研究を進めてきた。

(2) 国内においては、研究代表者は雑誌『思想』(岩波書店、939号、2002年7月)でオリヴィエ・ブロック氏と連携して論文を発表し(オリヴィエ・ブロック「古典主義時代の自由思想、地下文書、唯物論」、三井吉俊「地下の水脈へ」、また2006年度日本フランス語フランス文学会秋季大会(岡山大学)ではアルティガス・ムナン氏とともにワークショップ「哲学的地下文書と現代」(2006年10月29日)を主催した。基本的資料の提供としては、「平成13年度千葉大学重点経費・萌芽研究に対する助成」を受けて、無神論・唯物論を過激に主張する代表的地下文書 Jean Meslier, *Mémoire* を『ジャン・メリエ遺言書』(法政大学出版局、2006年2月、石川光一氏と共訳)として翻訳し、第四十二回日本翻訳出版文化賞(2006年10月6日)を受けた。

(3) 研究代表者は、邦語で発表した単行本の地下文書研究書、三井吉俊『知られざる奇書の世界——ヨーロッパ地下文学への道』

(丸善ブックス、1996年4月、仏語レビューは、Yoshitoshi MITSUI, « Prélude à la littérature clandestine du XVIIIe siècle (résumé) », *La Lettre Clandestine*, No.5, pp.101-104, 1997.)における第3章「凶悪の書という幻の光」で、残存地下文書中もつとも発見点数が多い、唯物論的無神論の一種のプロパガンダ、*Traité des trois imposteurs* 『三詐欺師論』が、1719年にオランダで刊行本とされた経緯を分析した。この調査は、上述の雑誌『思想』掲載論文「地下の水脈へ」(2002年7月)で継続された。このようにして作成された地下文書群、宗派的・政治的新聞が、フランスの国境をひそかに越えて、啓蒙前期の唯物論、たとえば先のジャン・メリエ司祭の『覚え書 *Mémoire* 』に大きな影響を与えたことは、平成11-13年度科学研究費補助金研究成果報告書『啓蒙前期のフランスにおける唯物論生成』(課題番号11610515、2002年3月)で報告された。また、平成14-16年度科学研究費補助金研究成果報告書『「ヨーロッパ意識の危機」期における神学論争と反宗教地下文書生成との内的関連』(課題番号14510563、2005年3月)では次のことを指摘した。『三詐欺師論』などの地下文書や亡命カルヴァン派ジャーナリストの活動により、これまでの通念とは異なり、18世紀当初からすでにホッブズ『リヴァイアサン』などイギリス思想がフランス国内に持ち込まれていたことである。

2. 研究の目的

(1) ナントの勅令廃止によりオランダへ思想的亡命を余儀なくされた、カルヴァン派出身の中小のインテリ・作家は、生計を立てるために、また強権的宗教弾圧から生じた「良心の危機」を乗り越えるために、執筆・翻訳・出版の国際的ネットワーク活動に精力

的に関わっていく。ヨーロッパ全体に流布したフランス語による著名な文芸新聞、『文芸共和国便り』や『古今東西文庫』などを創設したピエール・ベールやジャン・ルクレールもまた彼らの同類である。しかし、亡命カルヴァン派やアルミニウス派の理論家であったこの両者とは異なり、彼ら無名のジャーナリストたちは、イギリスからの新思想、オランダのスピノザ主義などを積極的に取り入れ、これをある意味でプロパガンダ化し、反フランス・反カトリシズムという目的のために、先の地下文書『三詐欺師論』などを作成し流布させ、また宗派的・政治的新聞に関わっていった。イギリス・オランダ・フランスの水面下における思想的営為をつなぐ地下文芸活動総体を実証的調査の対象とした。

(2) 本研究では特殊に、オランダにおいてベールやルクレールの周辺で活動していた、修道士からカルヴァン派へ改宗したニコラ・グードヴィルなどの諸批評、翻訳、政治的ジャーナリズムの中に、既成の政治的権威・宗教的権威からの離脱を探り、このような潮流が、既成宗派が主張する「神の正義」論を解体し、「良心の価値」を捜し求めながら、新たな唯物的世界観と結合しようとする、先の『三詐欺師論』などの地下文書の知的基盤をなすことを示したい。啓蒙前期に生産された地下文書の中には、ジャン・メリエ司祭の『覚え書』のごとくに、トリエント公会議体制下のフランス・カトリック教会末端でひそかに作られたものもあった。ピエール・キュッペ『万人に開かれた天国』もそのひとつであるが、これはピエール・ベール晩年における弁論批判に、カトリック教会側から出された、新たな社会に対応する理性主義的な教理組み換え提案の極北と言える。啓蒙中期

には匿名文書としてイギリス国教会内でもこれは利用し出版されるが、この事実が示す通り、啓蒙前期の地下文書総体がその宗派的出自を越えて弁論の枠組みを融解させていく様相を具体的に示したい。

3. 研究の方法

(1) 必要に応じ、Centre d'étude de la langue et de la littérature françaises des XVIIe et XVIIIe siècles (Université de Paris IV)へ海外出張し、研究で得られた結果について、Olivier Bloch、Geneviève Artigas-Menant、Alain Mothuらと討議し、また当研究所が集積した新しい資料を収集する。また、現在でも研究が進展していない、オランダで発行されていたグードヴィルの大部にわたる政治的新聞『ヨーロッパ諸宮廷の精神』などの著作数点を、PDFファイルでフランス国立図書館から収集し、その思想内容を分類・分析する。

(2) 基本的資料提供のために、分析結果を盛った詳細な注釈と解題を付した『三詐欺師論』、『万人に開かれた天国』など2, 3点の翻訳を完成させ、啓蒙前期の地下文書研究についてのまえがきを付けて、原典翻訳集『啓蒙の地下文書』を刊行する。また、より個別的な研究テーマについては、大学紀要論文などを通じて発表する。

4. 研究成果

(1) 研究の第一の成果としては、啓蒙前期の地下文書の原典翻訳集として『啓蒙の地下文書 I』(法政大学出版局)を刊行し、この中に『三詐欺師論』と『ジャン・メリエの遺言書』(ヴォルテールによって出版された要約版)を公表できたことがあげられるだろう。

『三詐欺師論』は、啓蒙前期の哲学的地下文書の中でも、発見写本数二百を数え、数量的にも第一位にランクされる代表的作品であり、その1768年秘密刊行本を邦訳し、1719年にオランダで秘密出版された『スピノザの精神』と題された版を異文として付すと同時に、出典調査を現在可能な限りで訳注に示した。この調査研究の結果、カトリック陣営対プロテスタント陣営、およびフランス・ブルボン家対オーストリア・オランダ・

イギリス連合で争われた「スペイン継承戦争」下、オランダにおける多くの亡命プロテスタント文筆家、中小のキリスト教分派に属する出版業者らの活動の中から、この著名な地下文書が誕生したらしいことが検証された。このような脱既成宗教的な思想的営為は、18世紀におけるいくつかのプロパガンダへと接続されていくがその様相は単純ではない。先に邦訳したジャン・メリエの『覚え書』というフランス国内で生産された独創的反宗教文書は、1730年代にはすでに「理神論」的的要約版が作成され写本として流布した。この地下文書を基にヴォルテールは『ジャン・メリエの遺言書』を作成し、1762年から数年間集中的にこれを自らの「反教権」闘争に用いるため意図的に配布した。上記の『ジャン・メリエの遺言書』はこれを翻訳（石川光一氏と共訳）したものである。

現在印刷中の『啓蒙の地下文書 I I』（法政大学出版局）には、ピエール・キュッペ『万人に開かれた天国』が含まれる。この作品はいわばカトリック教会内の異端文書であり、「反宗教文書」という啓蒙の地下文書要件からははずれるため、研究がなおざりにされてきた感がある。しかし、I. O. ウェイドがはじめて「啓蒙の地下文書」についての記述を行ったとき、「第一部 独自の作家たち」として第一章に掲げたのはこの作品であり、我々の弁神論解体の視点からの地下文書研究では重要な位置を占める。

国外において、この原典翻訳集は *Collection d'écrits philosophiques clandestins des Lumières*, Presses universitaires de Hosei, t.I, 2008, 1105p. として、その内容が紹介された（*La Lettre Clandestine*, No.17, pp.372-373, 2009）。欧米における地下文書研究は、ヨーロッパ各地に残された手書き写本研究に重点が置かれ

るが、これら文書の分析評価にあたっては写本か秘密刊行本かなどの流布形態を越えて個別に詳細に考察すべきである。翻訳および異文・訳注・解題における我々の主張の一つがこのことであるが、この原典翻訳集が「哲学的地下著作集成」として紹介されたことはこの立場が認知されたことを意味するだろう。

国内においては、一般読書界のことであるが、当翻訳集がルソー、ヴォルテール、ディドロなど啓蒙思想家の思想を育んだ文書群と書評紹介された（週刊文春、2009年12月4日号、132-133p、書評者立花隆）ことは、国内における啓蒙思想研究のすそ野を広げること寄与するだろう。

(2) この世界に充満する悪について神の責任を解除しようとするキリスト教弁神論は、哲学的レベルの論理と神学的レベルの論理とに分けて考えられる。災害・病・老・死などの自然的悪については、悪を存在の欠如様態と見なす存在論的答と、自然全体からみれば悪は必要要素であるとする宇宙論的答とが、哲学的に用意される。人間の邪悪・悪徳を意味する道徳的悪については、アダムの墮罪と、それにも関わらず神から贈られた「自由意志」という救済史的テーゼによって神は免責される、という神学的答が用意される。ベールはこのすべての答を、たとえば「マニ教徒」という登場人物を使って徹底的に解体したが、その意図するところは、「マニ教徒」への全面的降伏という不条理を避けるためには、原プロテスタント主義への復帰と理性が沈黙する信仰絶対論しかないを示すことだった。

ピエール・ベールが提出した弁神論のこのアポリアを一举に断ち切るために、カトリック教会に属するフランス寒村の一修道士ピエ

ール・キュッペが1710年代に独特の普遍的救済論を案出し、代表的地下文書のひとつ『万人に開かれた天国』として流布した。これは現世の政治的体制を、独自に解釈した救済論によって「神の正義」と完全に切断し、結果としてその正義は悪魔の断罪ひとつに集中され、全人類は自助努力により天国で階層化されるという理論であった。このような現世の社会・政治体制理解と神学的救済論との乖離は、同じくベール周辺に位置した元修道士でカルヴァン派に改宗し、オランダに亡命したニコラ・グードヴィルの文筆活動中にも検証される。雑文家グードヴィルは1700-10年代における、フェヌロン『テレマコスの冒険』批評と、反ルイ十四世を標榜する政治新聞『ヨーロッパ諸宮廷の精神』で知られるが、本研究課題直前に公表した論文「酔っ払い文士と鼻水をたらした説教師——ニコラ・グードヴィルによる『テレマコスの冒険』批判」で示した通り、この文芸批評は一種の反フランスの政治的プロパガンダと見なせる。この評論および彼の政治新聞において彼は、「良心の自由」という高度に神的価値を有する問題が、国際政治の中でまったく世俗的論理で処理されることを鋭利に摘出する。彼の心性には、「神の正義」への沈黙的態度と公共の安寧への世俗的希求が明らかに見られる。

グードヴィルが生きたのと同じ環境の中で誕生したらしい1719年版『三詐欺師論』は、もっとも著名な啓蒙前期における地下文書であるが、この一種のモザイク的作品に見出せるのは、弁神論の哲学的論理を解体するために、唯物論的に解釈された疑似スピノジスムへの接近と、また国際政治の中で「良心の自由」問題を空洞化させていった教権への根強い反感とである。弁神論批判を軸に展開する、哲学的、神学的レベルでの既成宗教体

制からのこのような離脱も、主権者—臣民、貴頭—民衆という社会組織に関する旧来の認識を直接揺るがすものではない。しかし、ジャン・メリエ『覚え書』に見られるように、継続的な戦乱と社会的疲弊の中で社会思想にも転換期が訪れている。破壊された良心の統一の回復、社会的安寧などが政治的選択にゆだねられる実存的経験を、中小の作家である地下文書作成者たちがどのように文書に定着していったかは今後詳細に調査されねばならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 三井吉俊、悪魔よ、悪魔よ——ピエール・キュッペ『万人に開かれた天国』について、千葉大学人文研究、査読有、39巻、2010、1-35
- ② 三井吉俊、書評——ピエール・ベール著、野沢協訳、『ピエール・ベール著作集』、日本18世紀学会年報、査読無、22巻、2007、116-118

〔図書〕(計1件)

三井吉俊、他、法政大学出版局、啓蒙の地下文書I、2008、pp.xiii-xix(まえがき)、pp.3-55、56-135、979-993(『三詐欺師論』、単独翻訳、異文・訳注、解題)、pp.927-973、974-976、1068-1082(『ジャン・メリエの遺言書』、翻訳のみ共訳、訳注、解題)

〔その他〕

千葉大学リポジトリで公開している本研究に関連する論文にアクセスするためのアドレスを参考として以下に掲げる。

<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/irwg10/Jinbun36-15.pdf>

<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/assist1/11610515.pdf>

<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/assist1/14510563.pdf>

<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/A11143832/KJ00004164579.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三井 吉俊 (MITSUI YOSHITOSHI)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：00157546

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：